様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２４５１

研究課題名（和文）「クンチャーン・クンペーン物語」の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Research on the " Sepha Khun Chang Khun Paen"

研究代表者
宇戸　清治（UDO, SEIJI）

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：３０１８５０５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：「クンチャーン・クンペーン物語」は、インドの仏教文学や中国文学からの影響を受けていない、タイ固有の、もっとも知られた古典文学である。本研究では、この作品の言語学的、文学的、社会史的特質と価値を明らかにした。研究の結果、口伝を基にバンコク王朝初期からラーマ五世時代にかけて編修された「クンチャーン・クンペーン物語」は、アユタヤー時代に成立した一地方の民間説話であったものが、タイを代表する古典文学となったことが分かった。研究に併行して日本語への翻訳も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
東南アジアの人文科学に関する研究は、社会科学分野に比べれば圧倒的に少ない。本研究はタイで最も著名な古典文学の本格的研究であり、4年間の研究結果と作品の全訳の公開を通じて、わが国のタイ研究、東南アジア研究に大いに寄与できる。

研究成果の概要（英文）：　The “Sepha Khun Chang Khun Phaen” is the most popular Thai classical literature that is not influenced by Indian Buddhist literature or Chinese literature. This research has clarified the linguistic, literary and social historical characteristics and values of this literature. The result of this research showed that the “Sepha Khun Chang Khun Phaen” was edited on the basis of the oral tradition from the beginning of the Chakri dynasty to the era of King Chulalongkorn’s reign. This literature was came from the one local tale established during the Ayutthaya era and later turned into the most famous Thai classical literature. In addition to the research of the historical background, the translation of this literature into Japanese has also done as a part of this research.

研究分野：タイ文学、タイ映画、タイ美術、東南アジア文学

キーワード：タイ　古典文学　クンチャーン・クンペーン物語　翻訳

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

研究課題名（和文）

１．研究開始当初の背景
(1)わが国におけるタイ文学の研究と紹介には戦前からの長い歴史がある。しかし、その内実は作品の翻訳と解説がほぼすべてで、学術研究としてはわずかに概説書があるのみであった。さらに、タイ古典文学に関する本格的研究はほぼ皆無で、タイの三大古典文学の一つに数えられる「クンチャーン・クンペーン物語」は短い抄訳しかなかった。

(2)他方、東南アジア研究の盛んな欧米では、タイ古典文学の研究と翻訳は日本よりはるかに先行していた。とくにクリス・ベイカーChris Baker とパースック・ポンパイチット Pasuk Phongpaichit による「クンチャーン・クンペーン物語」の英訳と解説（2010 年、タイ刊行）は質量ともに優れたもので、わが国における研究の深化と邦訳が急がれる状況にあった。

２．研究の目的
(1)目的の第１は、「クンチャーン・クンペーン物語」の文献学的、言語学的、文学的な研究と全編の翻訳である。これらは日本では初めての試みである。全訳が刊行されれば、日本では初の東南アジアの古典文学の本格的な紹介となり、わが国におけるアジアの古典文学の鑑賞と研究に新たなページを開くことになる。

(2)目的の第 2 は、本文学作品研究の成果をもって、従来の社会科学的手法では限界があったタイの前近代社会の状態、宮廷の階層構造や儀式、周辺属国との関係、国内の少数民族、日常の実践仏教、支配階層と被支配階層の価値観、芸能を含めた民衆文化等々の研究の深化に寄与することである。

３．研究の方法
(1)初年度は物語の成立と変容に関する文献学的アプローチによる研究を行った。「クンチャーン・クンペーン物語」はアユタヤー時代の原本は失われ、バンコク王朝成立後に複数のバージョンが刊行された。それらを比較することで最も古い物語の構造を推定する方法で研究を行った。

(2)次年度以降の言語学的および文学的アプローチによる研究では、作品中の詩形（チャンタラック）、押韻法、古語、諺、格言、慣用表現、人物表現、プロットなどに焦点を当てて、この物語の普遍性と特殊性を明らかにする方法で研究を行った。

(3)社会史的アプローチでは、物語の記述からタイの前近代社会の統治構造、経済システム、社会通念、空間と時間、宮廷文化と庶民文化、タイ族と諸民族を読み解き、当時のタイ社会を俯瞰する方法で研究を行った。

４．研究成果
(1)文献学的アプローチからの主な成果は以下の通りである。今日一般に普及している「クンチャーン・クンペーン物語」は、バンコク王朝のラーマ一世時代（1782-1808 年）にアユタヤー時代からの口伝を頼りに再構成の形で編修されたものを基にして、それ以降のラーマ五世時代（1868-1910 年）に至るまで、周辺属国との外交関係の変化や欧米諸国からの文物流入、資本主義経済の導入、華僑富裕層の台頭に示されるタイ社会階層の変化などの影響を受け、絶え間なく改編ないし追記された所産としての国民文学であることが分かった。
　物語のタイトルの頭部に付けられている「セーパー」（Sepha）の意味については、元首相で文学研究者でもあったククリット・プラモートが、1731 年に書かれた「旧緊急勅令集」に出てくる三人の刑務所統括官の名前から、「囚人たちの娯楽として拍子木のリズムに合わせて朗唱した即興物語である」と推測した説に対し、歴史家スチット・ウォンテートの「中国雲南省のシップソーンパンナーやベトナム北部の江河地域、メコン川流域の住民の間で昔から娯楽として韻律と木管楽器で自由に節回しをつけて歌うように語ったのがセーパーの語の由来である」とする説の方がより説得力があると認められた。
「クンチャーン・クンペーン物語」の各章の編修を誰が担当したかについては、本研究を通じても明確な記述や証拠が不明で、従来の説を覆すには至らなかった。ただ、プラーイガーム（クンペーンの実子で、チェンマイ討伐での功績により貴族に叙せられ、チャムーン・ワイウォーラナートの欽賜名を得た）の誕生について述べた 24 章は、その卓抜な語彙選択と内押韻・外押韻の韻律構成の美麗さから、当時の天才詩人スントーン・プーの作であることはほぼ間違いないと思われる。そのほかでは、17～18 章はラーマ二世、19 章はラーマ三世、その他の章の多くはラーマ一世の王子の一人であったクロムムーン・マハーサック・ポンラセープの作であろう。こうした推測は、ウィチットマートラーの従来通りの説を踏襲するにとどまった。新資料が発見されない限り、各章の作者が誰であるかを確定することは今後も困難と思われる。

(2)文学的アプローチからの主な成果は以下の通りである。王立図書館本「クンチャーン・クンペーン物語」は全部で 43 章、1085 頁を超えるタイ古典文学中最大の作品であるが、原初の物語はヒロインであるワントーンの死をもって終わる 36 章までであり、37 章以降はラーマ五世時代以降に加筆されたものであることが明らかとなった。さらに、チェンマイ討伐の話が主体の 24～34 章も原初の物語に加えられたもので、その意図は宮廷の権威を前面に打ち出し、下層階級に近かったヒーロー、クンペーンの存在を矮小化するためであったことが明らかとなった。上記の 24～34 章の記述内容が、ほとんど宮廷人と高級官僚の英雄的な戦争行為、華麗な宮廷恋愛、欧米風の自然描写、属国への差別的認識で埋め尽くされ、さらにアンチヒーローであるはずのクンチャーンの悪行が滑稽化された描写によって薄められ、資本主義の登場によって宮廷外に誕生した新富裕層の思想と行為が正当化されているのがその証拠である。一般民衆に人気のあった当初の説話にこれほどチェンマイ戦争に分量が割かれ、宮廷典礼、宮廷作法、外交、裁判、武器、戦術などの専門知識が採り入れられていたかは、はなはだ疑問である。

　こうした改編が行われた背後には、新しい「クンチャーン・クンペーン物語」を地方文化の泥臭さの残る民間説話から宮廷公認の高級な国民文学へと高めると同時に、近代世界の一国家としてのシャム（当時の国名）の高度な文化を文明国として欧米諸国に示さねばならないとする政治的意図が働いていたものと思われる。こうして、下層出身の人間という意味で民衆に好まれたクンペーンの存在感は相当に薄められ、逆にクンチャーンは富裕な新興階層を代表するヒーローとなった。つまり、ヒーローとアンチヒーローがまったく入れ替わるという決定的な改編が近代化過程で行われたと言える。

(3)言語学的アプローチからの主な成果は以下の通りである。「クンチャーン・クンペーン物語」は、当初は市井の言葉や民間風俗を大量に含んでいた民間説話に過ぎず、説話者がたえずその場の雰囲気を捕らえて当意即妙に登場人物やプロットを替えていたと思われる。そのことは、種々の改編の後に完成した今日の王立図書館本「クンチャーン・クンペーン物語」においてすら、一般住民のうち男の名の前には「アイ」（野郎）、女の名の前には「イー」（女郎）という蔑称が残っているといった例からも容易に推測可能である。つまり、当初の説話は下級役人、一般兵士、俗っぽい僧侶、農民、猟師、年中祭事、男女間の痴話などが多く挿入された庶民娯楽であったものが、欧米文化の受容が必要となった 1855 年のボーリング条約による開国以降、市井の言葉や卑猥シーンはカットされ、その結果として高尚な宮廷文学に変容したことが言語学的アプローチからも明確となった。

　言語学的研究からのもう一つの成果は、宮廷官僚の位階を現す語を豊富に収集できたことで、そのことによって宮廷内の序列と各官僚の役割が明確となった。例を挙げれば、チャオプラヤー（総理大臣）は文字通り宮廷官僚のトップに位置する大貴族で、内政・外政全般に権限と責任を負う。その下位のプラヤーは複数いて、王都の国内治安、宮廷行事、徴兵を含む軍事、交易、農政、土地等の長官であることもあれば、地方領主として徴税を含む全権限を任されている場合もある。その位階は従二位から従六位まであった。たとえば、苦境に陥ったクンペーンを一貫して助けたプラムーンシー・サオワラックは数字の「シー」（数字の 4）が示すように従四位で、今日の日本の官僚制度では部長とほぼ同じランクに当たる。ラーチャーラート（宮内警備隊長）は従六位、親切なプラヤー・ヨンマラート（刑務所長官）は従三位といった具合である。これらの位階は一般に分かりやすいように図表化の途中であるが、なお不明の部分もあり、他の古典文学作品、「王室典範」、「三印法典」などと比較する必要がある。

(4)社会史的アプローチからの主な成果は以下の通りである。この方法による研究成果は最も多いので、以下では物語の地理空間、宮廷官僚であることの意味、女性の地位についての記述に絞って叙述する。物語の地理空間は、国内においてはスパンブリー、カーンチャナブリー、アユタヤーなどチャオプラヤー川中部平原、国外ではラーンナー（現在のチェンマイ）、ラーンチャーン（現在のラオス）、トゥングー（現在のミャンマーの一部）といった比較的狭い空間に限られていて、原初の物語がこの地域特有の社会から発生したものであることを十分に推測させる。国を持たないラワ族、カレン族などが宮廷用人や屋敷家人、市場の売り子、農民、狩猟民としてしばしば登場することも、周辺諸国を統合して成立した多民族国家アユタヤーの姿を浮き彫りにしている。とくに主要登場人物の誕生地であるスパンブリーは、交易によって王室財政に莫大な富をもたらした森林資源が豊かで、軍事用として不可欠だった野生象（タイ語で「チャーン）の数も多かった。生来の富豪であるクンチャーンの名も象に縁があり、クンチャーンの先祖が地方象局長官の権限を使って財をなしたことが暗示されている。

　物語中の主たる登場人物の職業は王族や高級官僚である。三人の主人公の父親は皆そうであったし、罪人の子として王都の外で暮らしていたプラーイケーオ（後にクンペーン）自身もチェンマイ攻略に志願し、手柄を立てたことで高級官僚に登用されている。高級官僚とは国王に拝謁を許される人間になるということである。さらに、富裕であるということは賄賂を通じて宮中に自由に出入りできることを意味する。クンチャーンが幼い身で国王小姓に採用されたことがその証拠である。他方、低い位階の官僚に登用されたクンペーンに与えられた職務は、カーンチャナブリーの守備隊長であった。辺境の地に張りつけられている以上、宮廷へは容易に出入りできない。これらから分かることは、当時の男にとって名誉ある職業とは、平時には宮廷内で奉仕し、戦時は率先して戦場に赴くことのできる人間であるということになる。逆にい

えば、王族の生まれでない人間は、少なくとも官僚でなければ現実世界での権力を持てず、惨めな暮らしをするしかなかったということを表している。その証拠に、本作品では生産・流通活動に携わる農民や商人の生活に関する記述はほぼなく、彼らが実名で登場することもない。実名で出てくるのはせいぜいお屋敷の使用人や村の占い師・漢方医師、僧侶などである。したがって、この物語が他の古典文学のような高級王族を描いた物語ではなく、官僚や平民が主人公だという基本性格には変わりがないとしても、ここでいう官僚や平民とは農民のことではなく、王都と地方の両方を含む下級官僚とその従者という意味であることを知っておく必要があろう。

近代以前のタイの子供たちは、成人するまでは「クワン」（霊魂）が身体から逃げて病気にならないように頭頂部に髪を残して丸髷編みにした。これを「チュック」といい、男子は 13 歳、女子は 11 歳でこれを落とした。男性の結婚年齢には特に定めはなかったが、女性の場合は結婚年齢が早く、20 歳を越えるともう年増と呼ばれた。ちなみに、この物語の中ではクンチャーンは 16 歳、クンペーンは 18 歳、ピムピラーライは 16 歳で結婚している。チェンマイ攻略の際にラオ族の村長から贈与されたクンペーンの側室ラオトーンは 15 歳であることから、当時の女性はその身分には関係なく平均して 15～16 歳前後で結婚していたと推測される。その状況は、農村部の疲弊が進み、大量の若者が都市に出稼ぎに出る前の 1960 年代までのタイ農村部にみられた状況とそれほど大差はないということになる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　1　件）

宇戸清治『タイの古典文学と「クンチャーン・クンペーン」物語』（日本学術振興会科学研究費報告書）、私家版、全 274 頁、福井タイプ印刷株式会社、2019 年 3 月。

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。